

「AL」を促す授業のあり方とやり方

杉山 比呂之

一 はじめに

二〇一六年初夏、宮城県仙台市にある聖ドミニコ学院の及川俊浩先生から連絡をいただいた。「一緒にアクティブ（・）ラーニングの敷居を下げませんか？」この言葉をいただき、『歴史と地理 日本史の研究二五五』「アクティブラーニングを始めよう」（二〇一六年十二月号）の及川氏の論稿からのバトンを受けて、本稿を著すこととなった。「アクティブ（・）ラーニング」（以下、AL）が日本の教育界で話題となる今日において、私もこのワードをきっかけとして、教科を問わず全国の先生方や教育関係者と出会い、自分自身がアクティブラーナーとなり、多くのことを学び、新たな気づきを得ることができた。本稿では授業改善の一つの方法である「主体的・対話的で深い学び（AL）」をどのように促していけば良いか、また授業を

どのように創造していけば良いのか、日本史の授業のあり方（being）とやり方（doing）という両側面から論じていく。

二 杉山の日本史―日本史を学ぶ、日本史で学ぶ―

ALに出会う前の私は、約八〇％以上の生徒が親大学に進学する現勤務校（専修大学附属高等学校）において、「劇場型」の一斉授業を中心に授業を展開していた。「〇〇先生より杉山先生の授業のほうが良い」「日本史は先生の授業だから楽しい！」、当時の私はこのような生徒からの言葉を、恥ずかしながら額面通りに受け取り、自己満足の状態に陥っていた。しかし、ALと出会い、教師がいなくても育つ、「当事者意識を持つ自立した学習者」に生徒を育成すべきはずが、教師がいなくては育たない生徒を育成する、教師ありきの自己満足な授業を実践していたことに気づいたのだ。そのような過去の経験を踏まえて、現在では「日本史を学ぶ、日本史で学ぶ」を授業のあり方（being）^①の軸として、生徒のALを促す日本史の授業、「杉山の日本史」^②を実践している。私自身はあくまで、生徒が「脳動的」に学ぶ姿勢をALと捉え、あり方と常に向き合っている。やり方（doing）の部分では、オリエンテーションを重視（毎学期二〜三時間配当）したうえで、KP（紙芝居プレゼンター

ション)法を活用したレクチャーをおこなったり「杉山の日本史オンデマンド」と称してYouTubeで日本史の講義部分を動画配信したりしている。また、Twitterを活用した「Gitter」を開設して生徒の「いま」に響くような情報の配信、さらに対話型リフレクションをおこない、生徒と教師の一对一の問答、評定をゴールにしない評価(ルーブリック)のあり方などを模索しながら、生徒とともに日々成長しつつ授業を創り出している。二〇一六年現在、「杉山の日本史」は表1〜3のように展開をしている。

現勤務校では、三年次から専修大学進学コース(二年二単位/三年三単位)と他大学進学コース(二年二単位/三年五単位)に分かれるが、本時の展開は基本的に両コースとも同様の流れで実践をしている。他大学進学コースについては、三年次に文化史並びにテーマ史を、ジグソー法を活用したり、ワークのレベルを変化させるなどしたりして対応している。生徒の反応としては、表4のような意見があった。

これらの生徒の反応は、各学期の授業アンケート、年度末に数名の生徒に依頼して実施する「振り返り会」で出されたものの抜粋である。生徒からの意見をまとめると、全般的には「日本史を学ぶ」視点だけではなく、「日本史で

【日本史授業を通じて育成したい生徒像】

「当事者意識を持つ自立した学習者」

【日本史授業のあり方】場を創り、場に価値を&日本史を学ぶ、日本史で学ぶ

【本授業デザインのねらい】

- ・授業の主役である生徒が主体性をもち、協働性・社会性を身につけ、フリーライダーにならない
- ・インプット→スループット→アウトプットのサイクルで日本史の知識の定着を図る
- ・大学や現代社会で必要なプレゼンスキルを習得する
- ・プレゼンを通してより深い理解を得る
- ・他者との相互理解により考え方の多様性を実感する

【年間を通じたグラウンドルール】

- ①各クラスの生徒たちがオリエンテーション中に決定
- ②アクティブラーナーになるべし! (→自分自身でPDCAサイクルができる人間になる!)
- ③傾聴のスペシャリストになるべし! (→アンテナの感度を良くしよう!)

【授業の基本的な流れ(50分想定)】

※号令(生徒/最後の号令は行わない)

- ①【発表】生徒による前時の復習(KP法などによるプレゼン) [5分]
- ②【共有】本日のMQ(メインクエスト) & EQ(エッセンシャルクエスト) 共有&実物史料などの提示 [5分]
- ③【講義】KP法による本日の単元についてのレクチャー [5分]
- ④【理解】歴史を凝縮 [8分]
- ⑤【協働】ワーク(A)(B)(C)(個人/ペア/グループ) [15分]
- ⑥【対話】生徒と教員の問答 [7分]
- ⑦【内省】振り返りタイム(対話型リフレクション) [5分]

【評価】

定期試験/小テスト/レポート/パフォーマンス評価(KP法によるプレゼンテーション・振り返りシート・授業プリント) ※簡易版ルーブリックを活用

表1 「杉山の日本史」の概要

1. 日時 平成 28 年 月 日（ 曜日） 第 時限
2. 学級 専修大学附属高等学校 3 年 組 名（男子 名 女子 名）
3. 学級観 省略
4. 単位数 5 単位
5. 単元名 第 9 章 近代国家の成立
6. 単元目標

条約改正、日清・日露戦争とその後のアジア及び欧米諸国との関係の推移に着目して、我が国の立憲国家としての展開について考察させる。また、国民生活の向上と社会問題の発生、学問の発展や教育制度の拡充に着目して、近代産業の発展の経緯や近代文化の特色とその成立の背景について、主体的・対話的に知識の定着・思考をさせながら深い学びを促す。

7. 単元の指導計画〔全 4 時間〕

- (1) 明治維新 …………… 1 時間
- (2) 立憲国家の成立と発展…………… 1 時間
- (3) 日清・日露戦争と国際関係…………… 1 時間【本時】
- (4) 明治の経済 …………… 1 時間

8. 教科書・副教材

〔教科書〕『詳説日本史 B』山川出版社 〔資料集〕『図説 日本史通覧』帝国書院
〔一問一答〕『日本史 B 一問一答 完全版 2nd edition』東進ブックス

9. 本時の目標

- (1) 対話を通じた学び合いを主体的に行う。【関心・意欲・態度】
- (2) 日本にとっての日清・日露戦争の目的を考え、国民にどのような幸せをもたらしたか探究する。【思考・判断】
- (3) 日清・日露戦争の背景にある事象を多角的・多面的に判断し表現する。【技能・表現】
- (4) 日清・日露戦争を通じて、列強の仲間入りを果たしたことを理解する。【知識・理解】

10. 本時の展開 別紙参照

11. 評価 〔※授業時はルーブリック評価を活用〕

- (1) 対話を通じた学び合いを主体的に行うことができたか。【関心・意欲・態度】
- (2) 日本にとっての日清・日露戦争の目的を考え、国民にどのような幸せをもたらしたか探究することができたか。【思考・判断】
- (3) 日清・日露戦争の背景にある事象を多角的・多面的に判断し表現することができたか。【技能・表現】
- (4) 日清・日露戦争を通じて、列強の仲間入りを果たしたことを理解できたか。【知識・理解】

12. 参考文献

- ・ 瀧井一博『文明史のなかの明治憲法－この国のかたちと西洋体験－』講談社、2004 年
- ・ 河合勉『日本近代史授業シナリオ』地歴社、2009 年
- ・ 渡辺賢二『広告・ビラ・風刺マンガでまなぶ日本近現代史』地歴社、2007 年
- ・ 渡辺賢二『実物・絵図でまなぶ日本近現代史』地歴社、1993 年
- ・ 佐々木克『NHK さかのほり日本史④－明治「官僚国家」への道－』NHK 出版、2011 年
- ・ 加藤公明『考える日本史授業』地歴社、2015 年
- ・ 芝池宗克『反転授業が変える教育の未来』明石書店、2014 年
- ・ 小林昭文『アクティブラーニング入門』産業能率大学出版部、2015 年
- ・ 川嶋直『KP 法シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション』みくに出版、2013 年
- ・ 杉江修治『協同学習入門－基本の理解と 51 の工夫』ナカニシヤ出版、2011 年

表2 学習指導案（単元名：日清・日露戦争と国際関係）

	学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・支援上の留意点	資料等
授業前	【予習】	◎講義動画及び Twitter による日本史関連の情報を予習として積極的に取り入れる（復習にも活用可能）。	★事前に自作の講義動画をネット配信して生徒に告知をし、反転授業のサイクルを促す。	講義動画 Twitter
導入 10分	【発表 5 分】 生徒による前時の復習	※チャイムとともに号令をかける。 ◎生徒 1 人（2 人の場合もあり）が 5 分間で KP 法等を活用した前時の復習を行う。他の生徒は前時の復習を傾聴しながら、評価シートを記入する。	※タイムマネジメントに配慮する。 ★評価シートの事前配付と評価シートへの事前記入。 ※評価はパフォーマンス評価の一部とする。	評価シート (ループリック)
	【共有 5 分】 本日の MQ と EQ & 実物史料提示	◎ MQ と EQ を軸としながら、本時に興味関心を抱く。実物史料を手にすることにより、切実さを持つとともに、本時への意欲を高める。	★授業プリントを配付し、本日の MQ と EQ を共有し、本時と関わる実物史料から切実さを持たせる。	授業プリント 実物史料（正露丸）
展開 ① 13分	グラウンドルールの全体共有	※グラウンドルールの再確認。 ①チーム日本史で学び合い、高め合い、全員（志望校）合格！ ②アクティブラーナーになるべし！ ③傾聴のスペシャリストになるべし！	※グラウンドルールの再確認。	グラウンドルール
	【講義 5 分】 KP 法によるレクチャー	◎講義を聴きながら、プリントにメモをしたりアンダーラインを引いたりしながら、自らで思考をしつつ本時の概要の知識定着をはかる。	★日清戦争から日露戦争終戦に至る過程を、KP 法を活用して、おおまかに講義する。	授業プリント
	【理解 8 分】 ワーク（A）基礎 歴史を凝縮	◎個人で教科書、一問一答などあらゆるツールを活用して、8 分間で本時の内容をまとめる。	★内容の理解（知識・技能）／知識の構造化・組織化を促す場をデザインする。	授業プリント 教科書 一問一答
展開 ② 22分	【協働&対話 22 分】 ワーク（B）応用 資料読解 ワーク（C）発展 論述	◎（B）→教師との問答→（C）→教師との問答という流れで、各自のペースで内容を深める。 ◎教師との問答時には、主体性を持って自らを高める姿勢で臨む。	★各クラスの状況に応じて、個人／ペア／グループにさせて、（B）と（C）に取り組ませる。 ★各ワークが終了した生徒と問答をしたうえで回答メモを配付し、一対一の対応をする。	回答メモ
対話 5分	【内省 5 分】 振り返りタイム	◎確認問題／質問づくり／質より量による本時のまとめを実施し、ペアで他者に説明をする。	★早めに終了したペアには、宿題問題に取り組むように促す。	振り返りシート

表3 学習指導案別紙（本時の展開）

- ・先生の日本史は考えて協力して調べる学習が多いので、面白いシメになると思う
- ・新しい授業スタイル！！
- ・KP法は便利！
- ・動画をもっとたくさん配信してほしい
- ・クラスの間で話す機会が増えて、自分の考えを話すと自分の思いを自覚できる
- ・みんなで日本史を学んでいるという雰囲気が出て授業内で色々学べる
- ・文化史のエキスパート活動を担当した部分以外をもっと教えてほしい
- ・良くも悪くも疲れる授業
- ・授業って何？って考えるようになった
- ・もっと説明してほしい
- ・ノートがとりたい
- ・振り返りシートを使っている先生とのやりとり（問答）で、授業のことやそれ以外のことが話せて、ひとりひとりを見てくれている感じがしてうれしい

表 4 生徒の反応

「単元名：第一次世界大戦後の世界と日本」
① 問いの提示：本時の目標を共有する。[5分]
② 「聞く」：バリ講和会議を本時のメインとして、講義を行う。[15分]
③ 「読む」：国際連盟と国際連合の特徴を、資料集を用いて読み取る。[5分]
④ 「グループワーク」：当時の朝鮮と中国、ワシントン体制について教科書対応の穴埋めを行い、グループで確認する。[10分]
⑤ 「実践的な練習」：ペアで国際条約についてのワークを行い、定着を図る。[10分]
⑥ 答えのまとめ（「他の人に教える」）：ペアで本時のまとめを行い、自らの定着度を認識するとともに、ペアの人にも教え合う。[5分]
⑦ 「振り返り」：振り返りシートに記入する。[5分]
※「視聴する」：月に1～2回程度、DVD等の視聴覚教材を使用する。
※「デモンストレーション」：実物教材を用いて、何名かの生徒を指名して実際に何に使うのかを発問したり、実際に使用させて考えさせる。

表 5 2012 年当時の授業展開

- ・ペアやグループワーク時、フリーライダーが存在する
- ・一斉授業に慣れている生徒にとっては、いわゆる面倒な授業となっている
- ・評価の問題（活動状況などをどのように評価するか）
- ・オリエンテーションの内容の精査
- ・授業プリントおよび振り返りシートの質と量の向上が必要
- ・振り返りシート全てにコメントをすると、非常に労力がかかる
- ・予習／復習を促すきっかけづくりが必要

表 6 2012 年当時の授業の課題

学ぶ」視点での学びも有益に捉えていることがわかる。一方で、否定的な意見としては、一斉授業に慣れた生徒にとつては、「説明不足・板書不足」という意見が見られる。私自身は表1にある「当事者意識を持つ自立した学習者」「場を創り、場に価値を&日本史を学ぶ、日本史で学ぶ」「授業の主役である生徒が主体性をもち、協働性・社会性を身につけ、フリーライダ―にならない」などに基づいて授業を実践しているため、これらの生徒からの意見をおおいに参考にしながらも、軸をきちんと持ち続けるような心がけている。ただ、現在のような授業になったからこそ、カリキュラム・マネジメントや各教科間の相互連携、学校全体としての育成したい生徒像を意識するようになり、これまで以上に一授業の枠にとどまらない授業のあり方を模索するようになった。

ただ、このような展開となるまでには紆余曲折があった。授業改善に本格的に取り組みきつかけとなったのは、二〇一一年本校元教諭で現産業能率大学准教授の皆川雅樹氏⁽²⁾がそれまでの授業を「AL型」授業に転換したことだ。その様子を間近で見ていた私には疑問しか生まれなかった。私はいわゆる「アンチAL」の最たるものであったのだ。しかし、皆川氏の授業を見学したところ、私自身の中でパラダイムシフトが起こったのである。皆川氏の担当教室では生徒がまさに自立した学習者とな

り、互いに学び合い高め合っていたのである。そして、翌二〇一二年からALを促す授業に必要なスキル&マインドを私自身も学ぶために「チーム作り講座」⁽³⁾を開講した。私はまず、やり方から日本史の授業を改善し、ラーニングピラミッドを参考としながら「グループワーク」「振り返りシート」などを取り入れた。そして、その変化の過程で何よりも授業及び教師のあり方の重要性に気づかされていった。ALを促す授業への改善を本格的に始めた二〇一二年から二〇一三年頃は、表5のように授業を展開していたが、そうすると表6のような課題が見えてきた。

これらの課題は、ALを契機とした授業改善に取り組んでいなければ浮き彫りにならなかった、一教師としての財産である。

三、共有ではなく、共存を

—授業が変われば学校が変わる—

「場を創り、場に価値を自分自身で場を創ることができ、なおかつどのような場でも価値を見いだせること」、これが現在私の教師としてのマインドセット⁽⁴⁾の軸の一つとなっている。学校が学習する組織となるためには、学校を取り巻く全ての人々、つまり生徒・教師・保護者・地域の方々との連携が必要不可欠である。そのような中、「AL」という授業改善の一つ

の方法が、私自身はもちろん学校を取り巻く環境を大きく変えた。教科の枠を越えた授業相互見学・情報交換が活発になったことや、授業自体の概念が変わり教師のあり方を変えた。また、学内外の研修への積極的な参加や自主的な勉強会・研究会も開催され、これまで以上に学校のチーム意識が強まった。加えて、地域との連携も密となり、学校が一つのコミュニティとしてより機能するようになった。しかし、いまだ本校も変化の過程にすぎず、私も日々苦悩し、葛藤している。ただ、挑戦し変化を続けるからこそ、好機が生まれる。全国の意欲ある先生方とともに、授業を変え、学校を変え、社会を変えるために常に挑戦をし、変化をし続けていきたい。ただし、これらを決して「共有しようとは思わない。なぜなら、その「共有」が「強要」となる可能性があるからだ。だからこそ、まずは「共存」を目指したい。そして、少しでも良い方向へ変化しようと日々苦悩し、葛藤している方のきっかけ、勇気づけの一端に本稿がなれば幸いである。

註

- (1) 「杉山の日本史」「チーム作り講座」の詳細は以下を参照。
公式HP (<http://www.steamdesign.org>)
- (2) 皆川雅樹氏の授業実践は「高校日本史の授業のつくり方―アクティブラーナーの育成を意識した授業デザイン―」

〔歴史と地理 日本史の研究二五四〕二〇一六年九月号〕
参照。

(3) 前掲註(1)

(4) マインドセットとは、考え方の基本的な枠組みのこと。杉山自身は、「一教師として、こんな教師になりたい、こんな生徒を育てたい、こんな学校にしたい、こんなコミュニティにしたい…などに対しての自分の心の根っこ」と捉えている。

(すぎやま・ひろゆき／専修大学附属高等学校教諭)